移行対象と児童文学 Ⅱ

井原　成男

移行対象というコトバを最初に使いはじめたのは、イギリスの児童分析医であるウィニコットという人で、一九五三年に書いた「移行対象と移行現象」という論文からです。彼はまた、小児科医でした。彼は、幼児が肌身離さず持ち歩くもので、それがないと、ひどく不安になる、ブランケット（日本ではむしろタオルケットが多いのですが）そういう毛布だとか、ぬいぐるみ、人形などの無生物を移行対象と呼びました。

児童文学の中には、この移行対象がたくさん登場します。ここではその中から最もポピュラーな三つの物語をとり上げます。最初は「ジェインの毛布」で、一次的移行対象の好例です。二番目は、おなじみ「くまのプーさん」。これは二次的移行対象の例です。児童文学の中に登場する頻度が最も多いのも、このぬいぐ

るみたちです。最後の三番目の物語は「ジェシカ」です。これは空想のお友達の登場する物語です。

「ジェインの毛布」については、前号でお話ししましたので、ここでは、「くまのプーさん」のお話の続きから始めます。

「くまのプーさん」は、作者であるミルンの息子、クリストファー・ロビンがテディ・ベアと遊んでいる様子を見て、「クマのプーさん」の物語を空想していったこと、クリストファー・ロビンは、乳母（ナニー）にとてもなついていて、夏、海水浴に出かける時も、ナニーが行かないのなら、行きたくないと言うぐらい頼っていて、自伝の中で「私は、どこまでもナニーの子で、九歳までそうだった」と書くぐらいでした。この人は、しかし、彼が九歳の時、結婚してミルン家を去ります。この年ロビンは寄宿舎に入るのです。ロビン自身、ナニーは母のように大事で何でもしてくれる人であった、そして、クマのぬいぐるみは、ナニーの代わりだったといっている。前号では、そんなお話をしました。

ところで、クマのプーさんの物語世界の中で展開されるテーマはどんなものなのでしょうか。

この世界ではみんなとても親切です。とっても根暗のイーヨーなども、ちゃんとプレゼントをもらえる。誰も切り捨てられない、そんな母性的な世界なんですね。プーさんの中で私が最も好きなのは、はねっかえりのトラーです。いつもハネっかえっている、いたずらトラです。ところが、このトラーは最初から元気だったわけではない。このトラーにはお母さんがいな

いんです（これはまるで、現実のロビン自身に似ています）。このトラーが何を食べるのか？

プーたちは一生けんめい探してあげます。トラーが何を食べるのか、いろいろ試しまわり、ハチミツもドングリもアザミもだめだということがわかります。結局、トラーが食べられるのは、カンガのとこの子ども（赤ん坊）のルーが食べる麦芽エキスでした。トラーは、大きそうに見えたけれど、実はまだ赤ちゃんだったというところが、とても面白いところだと思います。私たち臨床家は、心の傷ついた子どもをいやすために、その子を一旦、赤ちゃん返りさせます。そうすることによって、その子はまた力を得ることができるのです。さて、このようにして、トラーはカンガのとこの養子になります。実子のルーと一緒に手弁当を持ってピクニックに出かけるトラーはどんなに幸せだったことでしょう。

ある日、プーたちが橋のところで遊んでいると、イーヨーが川を流れてきます。実はこれはトラーが、川辺で草を食べているイーヨーをつきとばしたからなんです。こんなにもトラーは元気になった。まさにどうしようもない。けれど憎めない、はねっかえりものです。このトラーと同じように、現実のクリストファー・ロビンもプーの世界の中で成長し、自立していったのだと思います。

やがてロビンは九歳になり、寄宿舎に入る（子ども時代に別れを告げる）ために、移行対象であるプーとお別れします。二人が別れ、そして百年たってもここにきたらいつでも会えるという固い約束をした場所は、ギャレオン凹地です。ここのところは感動的に次のように書かれています。

「そこで二人はでかけました。ふたりのいったさきがどこであろうと、またその途中にどんなことがおころうと、あの森の魔法の場所には、ひとりの少年とその

子のクマがいっしょにあそんでいることでしょう。

……プーぼくのこと忘れないって約束しておくれ、ぼくが百歳になっても！」

決して切れることのないプーとロビン、なんと幸せなことでしょう。

このギャレオン凹地というのは一体どこにあるのでしょうか。

それはその後のプーの運命によって明らかです。プーはアメリカ旅行にでかけます。クマのプーさんの物語があまりにも有名になり、このぬいぐるみを一目みたいというアメリカの少年、少女の熱望に応えたのです（まるで、ビートルズのアメリカ公演みたいにです）。このさい、ミルンが出した条件はぬいぐるみのプーがいくら汚れても決して洗わないというものでした（移行対象は洗うことで、匂いという感覚運動的な次元の記憶を喪失してしまうからです。またそれは、ウィニコットのいう「存在が連続しているという感覚」を破壊する行為です）。プーは今でもアメリカのダットン社の陳列欄の中にいるそうです。プーのぬいぐるみに会いたくないかというインタビューにこたえて、今や大人になったロビンは、こういっています。「平気です。愛情はいつも自分の心の中にあります」と。私たちは、ある対象との愛情をイメージとして内面化できてはじめて、ぬいぐるみの世界から旅立っていけるのだと思うのです。この内面化された場所がまさにギャレオン凹地なのです。

このようにみてきますと、クマのプーさんは、ロビ

ンという少年が、実際のテディ・ベアを使って、プーという物語（＝イメージ世界）の中で、プーとの二人の世界を作りあげてそこからぬけだしていく。まさにこれはぬいぐるみとその運命を、子どもの内面からとらえた物語です。

空想のお友達「ジェシカ」と移行対象

空想のお友達（イマージナリィ・コンパニオン）は欧米ではかなりポピュラーなコンセプトですが、日本ではまだあまりなじみがありません。私が初めてこの言葉を知ったのは、フライバーグの「魔術の年齢」にでてきた「空想の虎」を飼っている女の子の話からです。それはジアンという二歳八か月の子の持っている、空想上の虎で、名前を「笑い虎」といいます。この虎は、いくらジアンに叱られても、ただ笑っているだけ、決しておどしたり噛んだり吠えたりしない虎です。そしてこの虎は、ジアンが三歳を少し過ぎた頃いなくなります。フライバーグは、そのするどい感性で、この空想上の虎が、ジアンの心の健康のためには必要なものであり、健康なものであると述べています。

ところで、この「ジェシカ」という題の絵本は、ケビン・ヘンクスというまだ二十九歳という若手のアメリカ（ウィスコンシン州）生れの作家によるものです。ストーリーはとても単純ですが、絵本のもつ視覚的な効果も手伝って、空想のお友達のもつさまざまな特徴をあますところなく描き出しています。

主人公ルーシィにはペットもいないし兄弟もいません。でも彼女にはジェシカという大切な人がいます（これが空想のお友達です）。空想のお友達「ジェシカ」はルーシィといつも一緒です。月に行くときも、遊ぶときも、おばあちゃんの所に行くときも、いつも

一緒だと書いてあります（ジェシカは月へ行くという荒唐無稽な空想遊びにも非難なしで付き合ってくれるし、ルーシィが妹に意見するように教訓をたれる相手役も演じてくれるし、ルーシィ自身がぐずぐずしたいときも、ジェシカがのろくしていると責任転嫁できる相手です）。でも彼女の両親は「ジェシカなんていません」ときっぱりと否定します。ここのところは絵本一ページ使って大きな字で書いてあって、笑わせます。

ルーシィはまるで小さな子の世話をするように、ジェシカに食べさせてあげたり、本を読んであげたり、ブロックの積み方を教えたりします（こんなふうに相手を世話することで自分自身が成長していくのです）。ルーシィが怒っているとき、悲しいとき、嬉しいとき、必ずジェシカも共感して同じようにします。ルーシィはジュースをこぼしてもジェシカのせいにし、ベビーシッターに預けられるのが嫌なときには、ジェシカがお腹をこわしているからいけないと言い訳して、自分の欲求を貫徹します。

夜もジェシカと一緒に眠ります。朝もジェシカと一緒におきます。こんな場面ばかりみると、いかにもジェシカと一体化しているように見えますが、でもよく読むと「いつもある距離を保って遊んでいる」と書いてありますから、分身として対象化して付き合っているのです。

ルーシィはジェシカと同じ日に、二人揃って五歳の誕生日を迎え（空想のお友達は、自分と同じ年か少し下の年齢であることが多いのです）、やがて幼稚園に

上がることになります。ルーシィはジェシカと離れて行きたくないのですが、母親はジェシカをおいていけと命令します。母親の言葉に父親は少しかわいそうになったのかフォローして、「ジェシカを置いていっても、たくさんのいい子たちに会えるし、新しい友達もできるよ」とルーシィをなだめます。

ルーシィは両親に黙って、こっそりとジェシカを連れて登園するという芸当をやってのけます。このあたりが目に見えないイメージの世界の強みです。いつでも連れ歩けるものなのですから自由です。そして、いつでも秘密に連れ歩けるということは、心の中で操作し心の引き出しの中に整理して内面化するのにとても好都合だということなのです。

ルーシィは他の大勢の子たちの中に入れられますが、その子たちと簡単にはなじめず、不安で仕方がありません。ですからルーシィは自分のそういう気持ちをジェシカに対象化して写しだし（投影し）、「だいじょうぶよジェシカ、私がついているからね」といいます。ルーシィはジェシカを慰めるという方法を取って、実は自分を勇気づけているのです。

幼稚園でルーシィは、ジェシカとハニー・トンネルで遊び、お昼寝し、そしてお絵書きをします。本当はこういうことをしながら、ルーシィは次第にこの幼稚園という新奇な場所になじみ始めているのです。

ここからこの話はフィニッシュに入ります。子どもたちは二人一組になるようにいわれますが、ほかの子たちはみんな、すでに仲よしになった子とペアを組みます。ルーシィは本当は困っているのですが平気を装い、「ジェシカといるからいいや」と無理して突っ張っています。すると一人の見慣れない女の子がルーシィに近づいてきて、「いっしょに組んでもいいかしら」と話しかけるのです。シャイなルーシィはどんなふうに口をきけばいいのかわからなくてモジモジしていますが、この見慣れぬ子はむしろ積極的に自己紹介

し自分の名前を言うのです。その子は、なんとジェシカという名の子でした。ジェシカは本当にいたのです。ルーシィはごく自然にこの「ジェシカ」と遊び始めたのでした。ルーシィが「ジェシカ」と無二の親友になったことは言うまでもありません。

両親はジェシカなんていないと言っていました。私たちもそれは空想のお友達にすぎないと思ってきました。もしかしたら、ルーシィ自身だってそれは空想にすぎないと心の底では思っていたかも知れません。でも、ジェシカはちゃんといたのです。おそらく、心の中のジェシカは、ルーシィが現実の本当のジェシカとお友達になるまでの繋ぎ役、いわば橋渡しとして機能していたのだと思います。移行対象は、子どもが母親を内面化するためのつなぎとして機能していましたが、空想のお友達はさらに、子どもを母親以外の人（＝仲間）へつなぐ役割をもっているといえるでしょう。

私の知っているある大学生は、自分の空想のお友達をよく覚えていると言います。三人姉妹の長女である彼女は、お姉さんであるために我慢させられることが多く、そのストレスを「バルカン」という名前の空想のお友達に、全てぶつけていたということです。この「バルカン」はそんな彼女の無理な要求を全て受け止めてくれたのでした。またもう一人の大学生は、自分の理想の姿を全て所有している理想の女の子を、空想のお友達にしていたということです。空想のお友達というのは、こうした極端な「悪」や「善」の役をとることで、その子の衝動をほどよくコントロールしたり、社会から期待される無理な課題を和らげる緩衝帯のような役割をもっているのです。

（お茶の水女子大学）

参考文献

井原成男『ぬいぐるみの心理学』日本小児医事出版社、一九九九